

複文における主語制約の日英比較

吉 川 寛*

A Contrastive Analysis on
Like-subject Constraint in Complex Sentences

Hiroshi Yoshikawa*

1 はじめに

一般的に言って、主語になりうる語については animate なものが好ましい等、様々な制約がある事はよく知られている。複文に於いては文中に二つ以上の述語があるので各々の述語に対応する主語が存在する。その二つの主語に制約がなければ次の例文(1)から(4)の様に原則として何でも主語になりうる。

- (1) *I want him to go to Tokyo.*
- (2) *I want you to go to Tokyo.*
- (3) *I want us to go to Tokyo.*
- (4) *I want (myself) to go to Tokyo.*

しかし、一般的な制約の外に主節の主語と従属節の主語との間に特別な制約が見うけられる場合がある。この論文に於いては、いくつかの(主節の)動詞に限定し、その主節主語と従属節主語との制約について述べてみたいと思う。

2 本 論

2.1 同一主語制約 (like-subject Constraint)

2.1.1 「Promise」

吉川 (1985) で、動詞「Promise」の分析を行ったが、その中で「Promise」が「約束する」の意味で従属節を従える特、その従属節の主語に制約があり、それは原則として主節の主語と一致するのが好ましい事を述べた。(図1参照)

しかし、詳しく調べてみると例文(5)~(12)の様に、その一致に相当ゆれがあるようだ。^①

- (5)*I promise you that the neighbor will leave soon.^②

*外国語系列 (Department of Liberal Arts and Sciences—Foreign Languages)

- (6)*I promise you that you will leave soon.
 (7)*I promise you that my wife will leave soon.
 (8)*I promise you that my son will leave soon.
 (9)?I promise you that I or my wife will leave soon.
 (10) I promise you that I and my wife will leave soon.
 (11) I promise you that we will leave soon.
 (12) I promise you that I will leave soon.

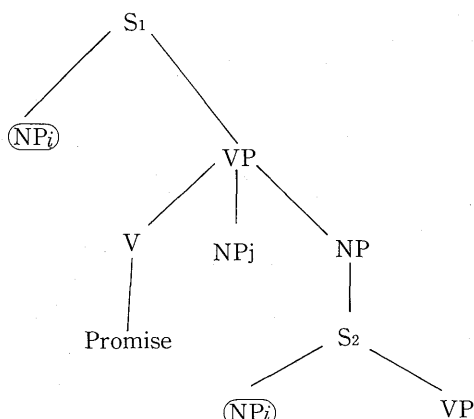


図 1

吉川 (1985) でも少し触れた様に、主語の意志で主語自身が可能な事を実行する事を表明すると言うのが「Promise」の意味機能であるから、原則として他人の行為に対してまで「Promise」する事は不可能である。しかし上述した“ゆれ”は自己をどのあたりまで拡大解釈できるかと言う問題を提出していると言える。例文の(9)あたりが境界となるようである。日本語の「約束する」はどうであろうか。

- (13)*私は貴方に隣の人がすぐ出ていくと約束する。
 (14)*私は貴方に貴方がすぐ出て行くと約束する。
 (15)?私は貴方に妻がすぐ出て行くと約束する。
 (16)?私は貴方に息子がすぐ出て行くと約束する。
 (17) 私は貴方に自分(私)、あるいは妻がすぐ出て行くと約束する。
 (18) 私は貴方に自分(私)と妻がすぐ出て行くと約束する。
 (19) 私は貴方に自分(私)達がすぐ出て行くと約束する。
 (20) 私は貴方に自分(私)がすぐ出て行くと約束する。

日本語の場合は、従属節の主語は「私」より「自分」という再帰代名詞の方が自然であるが、ここでは一応英語の「I」と対応するものとする。英語、日本語とも個人差があるので断定するのは難しいが、日本語の方が、その伝統的な人間関係や家族関係を反映して自己の拡大範囲 (in-groupness) は大きい様である。特に、妻や息子に英語の「my」にあたる「自分(私)の」を付加すれば相当良い文になるようだ。このあたりを英語圏の個人主義が反映していると思われる英語の(5)から(12)までの例文と対照すると興味深い。

2.1.2 「try」

「promise」の様に two-place verb ではないが同様に同一主語制約を有すると考えられる動詞に「try」がある。よく言われる様に、「try」は(21)の様に to 不定詞をとり、その不定詞の主語は

全体の主語と一致する。したがって(22), (23)の様な構文はとれない。

(21) I try to eat fish.

(22) *I try for him to eat fish.

(23) *I try that he eats fish.

(22), (23)の構文ではたとえ「him», 「he」を「myself», 「I」にそれぞれ変えても非文となるようだ。

しかし、従属文が疑問の意味内容を有する時は非文とはならない。

(24) Try how far you can throw it.

(25) I'll try if I can jump across this stream.

(24)は命令文であるから主節の主語は you と考えられるので従属文の主語と一致している。(25)の様な構文をモデルとして前述の「promise」と同様に調べてみると次の様な結果となった。

(26) *I'll try if he can jump across this stream.

(27) *I'll try if you can jump across this stream.

(28) *I'll try if my wife can across this stream.

(29) *I'll try if my son can across this stream.

(30) ???I'll try if my family can across this stream.

(31) I'll try if we can across this stream.

(32) I'll try if I and my wife can across this stream.

(33) I'll try if I can across this stream.

「promise」と「try」はお互いにかなり質の異なる動詞であるがよく似た結果がえられた。「try」に対応する日本語の動詞は何かとなると問題であるが、ここでは一応「やってみる」として同様な調査を行った。

(34) *私は彼がこの川を飛び越せるかどうかやってみる。

(35) *私は貴方がこの川を飛び越せるかどうかやってみる。

(36) ??私は妻がこの川を飛び越せるかどうかやってみる。

(37) ??私は息子がこの川を飛び越せるかどうかやってみる。

(38) ?私は自分(私)の家族がこの川を飛び越せるかどうかやってみる。

(39) 私は自分(私)達がこの川を飛び越せるかどうかやってみる。

(40) 私は自分(私)と妻がこの川を飛び越せるかどうかやってみる。

(41) 私は自分(私)がこの川を飛び越せるかどうかやってみる。

「約束する」と比較して制約の度合いが強い様であるが、英語の「try」に比べるとやはり in groupness は「やってみる」の方が広い様である。

2.2 反同一主語制約 (anti-like-subject constraint)

「promise」や「try」とは反対に、主節の主語と従属節の主語が一致しない方が好ましい場合を考えてみよう。まじ、直感的に考えられるのは推量表現と伝聞表現である。これらの表現は、

原則として, speaker (主節の主語) が未確認な事象を憶測, または伝聞するということである。認知が自動的に行なわれる自己及び自己の延長線上にある主体が主語である場合, その行為または状態を推量あるいは伝聞する事は不自然なことになるはずである。

2.2.1 「think」と「hear」

推量の動詞として「think」, 伝聞の動詞として「hear」が夫々代表的な動詞と考えられる。

(42) I think that John can play the piano.^③

(43) I think that you can play the piano.

(44)? I think that my wife can play the piano.^④

(45)? I think that we can play the piano.

(46)? I think that I and my wife can play the piano.

(47)*I think that I can play the piano.^⑤

「think」の場合は, インフォーマントによってずれは多少あるもののかなりの線まで使用可能であるようだ。

(48) I hear that John can play the piano.

(49) I hear that you can play the piano.

(50)??I hear that my wife can play the piano.

(51)??I hear that we can play the piano.

(52)*I hear that I and my wife can play the piano.

(53)*I hear that I can play the piano.

「hear」の場合は「think」より制約が強くなっている。これは, 主節の主語が知っているべき事を第三者から知らされる事の不自然さがその様な結果に表われていると考えられる。英語母国語話者の家族観が文の是非を決める基準に反映していると思われ興味深い。

次に日本語の方であるが, 「think」には「思う」, 「hear」には「そうだ」を対応させて英語同様の調査を行った。

(54) 私は田中さんがピアノを弾くことができると思う。^⑥

(55)? 私は貴方がピアノを弾くことができると思う。^⑦

(56)??私は妻がピアノを弾くことができると思う。

(57)??私は自分(私)達がピアノを弾くことができると思う。

(58)*私は自分(私)と妻がピアノを弾くことができると思う。

(59)*私は自分(私)がピアノを弾くことができると思う。

(60) 田中さんはピアノを弾く事とができるそうだ。

(61)??貴方はピアノを弾くことができるそうだ。

(62)???妻はピアノを弾くことができるそうだ。

(63)*私達はピアノを弾くことができるそうだ。

(64)*私と妻はピアノを弾くことができるそうだ。

(65)*私はピアノを弾くことができるそうだ。

日本語でも英語同様「そうだ」の方が「思う」より制約が強い。「think」と「思う」、「hear」と「そうだ」を比較してみると相対的に日本語の方が制約が強く表われている様である。言い換えれば、日本語の方が in-group に入れる者の範囲が広いと言う事である。反対の制約を持ちながら「promise」、「try」と同じ様な結果となるのは興味深い。次に今少し推量表現について他の動詞を調べてみよう。

2.2.2 It VP to me 型

英語で「seem」、「appear」、「look」は推量を表わす動詞としてよく使われている。これらの動詞は非人称主語の it を主語として、「seem」と「appear」は that に、「look」は like によって節を導くと言われている。「think」や「hear」と異って「to me」の様な対格的なものが使われているが、これは一種の patient あるいは experiencer と考えれば主節の主語と考えてもよいであろう。とすれば「think」や「hear」と同様に反同一主語制約を有するはずである。

- (66) It $\left\{ \begin{array}{l} \text{seems} \\ \text{appears} \end{array} \right\}$ to me that John can play the piano.
 (67) It $\left\{ \begin{array}{l} \text{seems} \\ \text{appears} \end{array} \right\}$ to that you can play the piano.
 (68)? It $\left\{ \begin{array}{l} \text{seems} \\ \text{appears} \end{array} \right\}$ to me that my wife can paly the piano.
 (69)? It $\left\{ \begin{array}{l} \text{seems} \\ \text{appears} \end{array} \right\}$ to me that we can play the piano.
 (70)? It $\left\{ \begin{array}{l} \text{seems} \\ \text{appears} \end{array} \right\}$ to me that I and my wife can play the piano.
 (71)*It $\left\{ \begin{array}{l} \text{seems} \\ \text{appears} \end{array} \right\}$ to me that I can play the piano.
 (72) It looks to me like John can play the piano.
 (73) It looks to me like you can play the piano.
 (74)? It looks to me like my wife can play the piano.
 (75)? It looks to me like we can play the piano.
 (76)? It looks to me like I and my wife can play the piano.
 (77)*It looks to me like I can play the piano.

これら三つの動詞は、詳しく調べれば少しづつ語法上の相違がある様であるが、日常の会話では同じ様に使われている様である。上記の例文程度では夫々の相違が表われる所まで行かず同様な結果となっている。全て「think」とよく似た制約であると言える。これらの動詞に対応する日本語の動詞を決定する事は非常に難しい。ここでは対応しているかどうかは分からないが「思われる」、「らしい」、「ようだ」を取り挙げてみる。これらの動詞は実際に表層に表われるかどうかは別にして、「私にとっては」と言うニュアンスが含まれていると考えられる。この点では英語の「seem」等と共通すると言ってよいであろう。

- (78) 田中さんはピアノを弾くことができる $\left\{ \begin{array}{l} \text{らしい} \\ \text{思われる} \end{array} \right\}$ 。
 (79) 貴方はピアノを弾くことができる $\left\{ \begin{array}{l} \text{?らしい} \\ \text{?ようだ} \end{array} \right\}$ 。

- (80) 妻はピアノを弾くことができる { $\begin{smallmatrix} ? & ? & \text{らしい} \\ ? & ? & \text{と思う} \end{smallmatrix}$ われる }。
- (81) 私達はピアノを弾くことができる { $\begin{smallmatrix} * & \text{らしい} \\ * & \text{と思う} \end{smallmatrix}$ われる }。
- (82) 私と妻はピアノを弾くことができる { $\begin{smallmatrix} * & \text{らしい} \\ * & \text{と思う} \end{smallmatrix}$ われる }。
- (83) 私はピアノを弾くことができる { $\begin{smallmatrix} * & \text{らしい} \\ * & \text{と思う} \end{smallmatrix}$ われる }。

日本語の場合は英語と異なりそれぞれの推量表現の間に若干の相違が見られる。これは、例えば、「ようだ」は他の二つとは異り、客観的な証拠があって判断を下る時に用いられるもので、場合によっては一人称主語の場合でも是となることがあるようだ。この論文で推量動詞の分析が主たる目的ではないので次の例文を示すにとどめる。

- (85) 彼とけんかをすれば、私が勝つのがむずかしい { $\begin{smallmatrix} ?? & \text{らしい} \\ ? & \text{と思う} \end{smallmatrix}$ われる }。

「seem」等と「らしい」等を比較すると、これも前述の動詞同様どちらかと言えば日本語の方が in-groupness が広く、その結果反同一主語制約が強く働くようである。

4 まとめ

以上の調査の結果を表にすると次の様になる。

それぞれの項でも述べたが、同一主語制約、反同一主語制約いずれの場合でも、in-groupness に関しては英語より日本語に於いてその範囲は広いことが表から分かる。しかしこの様なことは、言語分析によらなくても、社会学や文化人類学での観察でも導き出せるものである。この論文では、結論を云々するのではなく、言語の持つ統語上、意味上の制約を利用して社会的、文化的現象を分析すると言う試みが主たる目的である。この種の分析を行うにあたって困難な点は、二つの要素が相関的に関係していると言うことである。一つは、日英それぞれの文化圏に於ける歴史、

表 1

VP NPs	英 語		日 本 語		VP NPs
	promise	try	約束する	やってみる	
neighbor	×	×	×	×	隣の人
you	×	×	×	×	貴方
my wife	×	×	?	??	妻
we		?			自分(私)達
I and my wife					自分(私)と妻
I					自分(私)

NPsは従属文の主語を表わす。

表 2

VP NPs	英 語		日 本 語		VP NPs
	think	hear	思う	そうだ	
John					田中さん
you				??	貴方
my wife	?	??	?	???	妻
we	?	??	??	×	自分(私)達
I and my wife	?	×	×	×	自分(私)と妻
I	×	×	×	×	自分(私)

表 3

VP NPs	英 語		日 本 語		VP NPs
	seem appear look		らしい 思われる	ようだ	
John					田中さん
you			?		貴方
my wife	?		??	?	妻
we	?		×	×	私達
I and my wife	?		×	×	私と妻
I	×		×	×	私

伝統を反映した人間関係や家族観の相違であり、もう一つはそれぞれ対応する語彙が有する意味範囲のずれである。そして、より正確な結論を導くには、二つの要素のうちどちらか一方に於いてその相違や類似が正確に把握されている必要がある。今回は「promise」と「約束する」、「think」と「思う」等、それぞれの対応語彙の意味範囲が必ずしも正確に把握されているとはいえないので、それらを規準として出した in-groupness に関する結論も当然正確さを欠くことになる。今後は、使用語彙の意味分析をより精密に行った上でそれを尺度として様々な社会的、文化的事象の分析を行いたいと考えている。また、見方を変えれば、正確な社会、文化事象の分析が行われれば、それを尺度として逆に言語を分析する事が可能である。これからは、この様な、言ってみれば学際的な協力が求められるのは当然であろう。

注

① インフォーマントは3名で全てアメリカ人である。

- ②* は非文を表わす。
- ③ can は能力を表わす。以下全て同じ。
- ④結婚直後の場合は是であるとするインフォーマントもいた。
- ⑤謙譲表現の場合、または、長い間ピアノを弾いていなくてまた弾きはじめる様な場合は是となる。
- ⑥「できる」は能力を表わす。以下全て同じ。
- ⑦相手をはげます様な時は是となる。

参考文献

- (1)Curme, George O .1931. *Syntax*. D. C. Heath & Co.
- (2)Chomsky, Noam 1965. *Aspects of The Theory of Syntax*. M I T Press.
- (3)大塚高信編 1961. 英語慣用法辞典, 三省堂
- (4)石橋幸太郎編 1966. 英語語法辞典, 大修館
- (5)井上和子 1976. 変形文法と日本語 (上, 下), 大修館
- (6)——— 1978. 日英対照日本語の文法規則, 大修館
- (7)小西友七編 1980. 英語基本動詞辞典, 研究社
- (8)吉川 寛 1985. “「Promise」考” 中部大学国際関係学部紀要 No.1